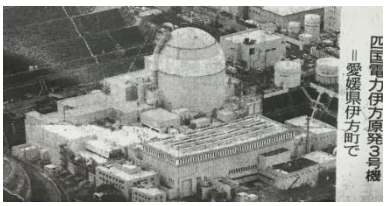
伊方原発の電源喪失トラブル


四国電力伊方原発3号機＝愛媛県伊方町で

朝日新聞 2 月 7 日朝刊は「伊方核燃料プール　冷却装置 43 分停止 3 号機 先月の電源喪失時」と報じている。あの 3・11 福島第一原発事故を思い起こした。

四国電力伊方原発（愛媛県伊方町）で 1 月 25 日、外部電源を一時喪失するトラブルが起きた際、3 号機の核燃料プールの冷却装置が 43 分間にわたって停止していたことが、四国電力への取材でわかった。この影響でプールの水温が約 1 度以上上昇したという。四電は「規定の上限温度には達しておらず、安全面への影響はなかった」としている。

四電によると、電源を喪失するトラブルは 1 月 25 日午後 3 時 44 分に発生。予備電源が起動し、3 号機への電力供給は 9 秒後に再開した。核燃料を保管しているプールの電源も停止した。3 号機ではプールを冷やすため、水を循環させるポンプなどが止まり、この電源を起動できたのは 43 分後の午後 4 時 27 分だった。3 号機は昨年末に定期検査に入り、プルトニウム・ウラン混合酸化物(MOX)を含む燃料集合体 157 体が原子炉から取り出され、プールに移されたばかり。MOX 燃料は通常のウラン燃料より熱量の管理が難しいとされる。プールには過去に取り出した燃料もあり、計 1504 体が保管されていた。プールの水温は電源喪失直前の 25 日午後 3 時に 33.0 度だったが、同 5 時に 34.1 度に上昇。ポンプが起動すると、その後、徐々に下がった。上限温度は 65 度とされている。四電は「手順に沿って原子炉に関連する冷却ポンプなど、プラントの安全性を維持する機器から順に起動させた」と説明している。

写真の伊方原発については、東京新聞 2 月 1 日「こちら特報部」も次のように伝えている。伊方原発が司法判断によって運転停止に追い込まれたのは、17 年 12 月に広島高裁が出した仮処分決定に続いて 2 度目だ。松山市を拠点とする市民団体「伊方原発をとめる会」事務局の和田宰さんは、2 度目の運転差し止めについて、「今回は司法が初めて『中央構造線』の活断層の問題に向き合い、新たな学説も無視せずにその危険性を指摘した」と評価する。(1 月 21 日レポート「伊方原発再び差し止め」参照)

和田さんらは今回の決定で指弾された部分以外の、四電の不手際ぶりを問題視している。定期検査中の先月 12 日には制御棒 1 体が約 7 時間、原子炉から引き抜かれる状態になっていた。20 日には使用済み核燃料プール内で燃料を点検中に、燃料が点検装置に正しく挿入されずに装置の枠に乗り上げ、燃料落下を示す信号が発信された。

（さらに、先述した 25 日の電源喪失トラブルに）

この時も、電源一時喪失という重大事態でありながら、事故情報が県や地元の伊方町に伝えられただけで、住民にはすぐに知らされなかった。「即時公開レベルの情報なのに、前日午後に発生した事故を、私たちは翌朝のニュースで初めて知った」と和田さん。

(2020 年 2 月 9 日)